2018 年 10 月 30 日発行

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 30 号

「この道に従う者」

東北教区主教　ヨハネ 吉田　雅人

1892 年に数名の女性信徒によって始められた、祈りと献金によって伝道を助ける小さな働きは、感謝箱献金運動として 125 年余がたちました。そしてこの運動を主体的に担うために、日本聖公会婦人補助会が組織されました。

「ガリラヤのほとり 30 号」に寄稿するにあたって、感謝箱献金運動や日本聖公会婦人会の歴史をおさらいするために『息吹をうけて』を開いてみましたら、その序章に上述のようなことが記されていて、とても新鮮な気持ちになりました。婦人会という組織の中から感謝箱献金運動が生まれたのではなく、感謝箱献金運動を続けていくために、日本聖公会婦人（補助）会という組織が生まれた、そのことに改めて気づかされました。

考えてみますと、イエス様の働きも「イエス様と弟子団」という組織ではなく、イエス様の「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい（マルコ 1:15）」という宣教の第一声、「神の国悔い改め運動」から始まったのではなかったでしょうか。その意味で、私たち「この道に従う者（使徒 9:2）」であるキリスト者一人ひとりの、小さくても自発的な働きが大切なのだと思います。

125 年前の諸先輩はこの働きを、「祈りと献金によって伝道を助ける」と表現されましたが、この時代を感じさせる表現も、現代の理解に通じるものがあると思います。と言いますのは、感謝箱献金のホームページに「感謝箱献金は･･･日々の感謝と喜びの献げものを持ち寄って　神様の宣教の業に参与させていただける『神さまからの贈り物』です」と説明されています。つまり伝道・宣教の主体は神様であって、この神様の宣教・伝道の働きに私たちが参与させていただく。その「参与させていただく」ことを、125 年前の諸先輩は「助ける働き」と表現したのでしょう。

この働きの基本は「感謝と祈りを献げる」ということです。「献げる」とは、神様が私たちに与えてくださった恵みに対する、私たちの応答です。そして神様が与えてくださった恵みとは、人それぞれにあると思いますが、究極的にはイエス様を私たちのそばに送ってくださり、共に居させてくださったことです。そのイエス様が私たちのために、ご自身の生命を十字架に献げて下さり、私たちが生きることのできるようにしてくださったことにあります。

このことを覚え、私たちは自分を大切にするのと同じだけ、他の人々を大切にする生き方を、「この道に従う者」として、一歩づつ歩んでいきたいと思います。

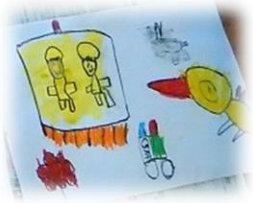
お献げ先から～

国際子ども学校（ELCC）

名古屋学生青年センター
主任主事　谷景子

いつも国際子ども学校（ELCC）の活動にご支援をいただきありがとうございます。
お陰様で、ELCC は今年創立 20 年を迎えることができました。
みなさまのご理解とあたたかいお祈りのうちにこれまで続けてくることができました。心より感謝申し上げます。

ELCC は 1998 年に名古屋学生青年センターが設立して以来 20 年、名古屋市を中心とした地域に在住する、フィリピン人労働者の子どもへの教育支援を行っています。
学齢期になっても、地域の小中学校への入学が認められない子ども達のために設立された学校ですが、粘り強く行政等へ働きかけた結果、現在は、ほとんどの子どもたちが地域の小・中学校に入学することが可能となっています。しかし、さまざまな理由により学校へ通えない子どもも存在しています。



また、フィリピン人家庭で育ち、日本語の能力が充分でない子どもの就学はストレスが大きく、不登校になってしまうこともあります。ELCC は、子どもたちを地域の学校へ送り出す準備の場であると同時に、子どもたちが安心して毎日過ごせる場としての役割を担っています。

ELCC には現在、4 歳から 12 歳になる 12 名の子どもたちが通っています。毎週月～金曜日の午前 9 時 50 分から午後 2 時 30 分まで、毎日 5 時限の授業をしています。フィリピン人の専任教師 1 名と非常勤教師 1 名の他、退職した学校の先生や社会人、学生など 20 名程の地域の方がボランティア教師として関わっています。
フィリピンでは幼稚園から勉強を教えていますので、ELCC でも日本語、英語、算数、理科、社会、音楽、体育、家庭科、図工などの授業を行っています。特に、日常的に工夫しながら日本語の学習に力を入れています。また、フィリピン人としてのアイデンティティの確立をめざし、子どもたちの母国の言葉（フィリピノ語）や文化も大切に教えています。子どもたちが社会性を身につけ、日本ではもちろんのこと、自国に帰って生活することになったとしても、彼らの将来が豊かなものとなるよう願っているからです。

ELCC に通って来る子どもの保護者はシングルマザーが多いです。また、外国人労働者である、彼女・彼らにとって、安定した職業や所得を得ることは困難な場合が多く、経済的な理由で就学を諦めざるを得ない子どもたちもいます。ELCC は全ての子どもたちが等しく学ぶことができるよう、活動を続けてまいります。
どうぞ ELCC の働きをご理解いただき、今後ともお祈り、応援いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

アルディナウペポ　「東アフリカの子供を救う会」

事務局長　　千村雅信

東アフリカの子供を救う会・アルディナウペポは、長年の希望であった電気を使った授業を始める事が出来るようになり電動ミシンの購入をすることになりました。現在２種類のミシンを発注する予定です。当初は電気が使えるようになったら男子のための溶接技術習得校を考えていて、裁縫技術訓練は終了する予定でした。本来は両方の技術が学べる場所になる事が夢でしたが両方の授業は資金的に無理であったので第２段階として男子の訓練と考えていました。しかし報告会でこれからのプランとして裁縫教室は終了して溶接教室を開始するというお話をしたところ、支援者から今までの裁縫教室をもっとスキルアップして続行する事が出来ないだろうかという提言を頂き方針を変更した次第です。

また、長年にわたって一緒に訓練所を運営してきたスタッフたちの給料が、同じような援助団体のスタッフに比べると著しく低額になってしまったため、スタッフの待遇も向上しなくてはならないと考えました。日本に暮らしているとあまり物価が上がらないためアフリカの物価高騰に考えが及ばなかったわけです。これからは２年間のプランを作り現地スタッフＵＹＡＰとともにスキルアップを目指します。

コーディネーターの桜木さんが８月グルに行き卒業生のレポをしてきて下さったので掲載します。

「みなさんのおかげで、わたしの人生が大きく変わった」

そう語るのは、職業訓練校の洋裁プロジェクトの卒業生たち。今回は、日本のみなさんの支援がどのように実を結んでいるかをお伝えします。

この学校で学んだアティム・ミリアムに会いに行きました。彼女は、2010 年、ちょうど 20 歳のときに学校を卒業したそうです。「学校に通うまでは、ずっと村にいました。私にはマンゴーを売る仕事をしていました。でも、生活が苦しくてどうにか状況を変えなければと思っていたときに、学校のことを知りました。すぐに応募したら、光栄なことに入学することができました。一生懸命洋裁の技術を学びました」

ミリアムは、卒業時に学校から寄贈されたミシンを大切に使いながら洋裁の仕事を続けています。グルの中心部にある市場の共同店舗スペースの一画にある小さな机が、彼女の仕事場です。「子どもが 4 人います。13 歳、10 歳、8 歳、2 歳。子どもたちの学費が必要だから、ここで朝から夕方まで仕事をしています。夫は 1 年前に家を出て行ってしまいました」　女手ひとつで 4 人の子どもを育てているミリアム。仕立て屋さんとして店舗を出すのが彼女の夢です。「もっとお金を稼いで、とにかく布を買えるようになりたいです。今は、お客さんが持ち込んだ布でオーダーされたものを作っているだけだから、仕事量をもっと増やしたいの。もっとお金があれば、ロックミシンやデザイニングミシンを買って、他の仕立て屋さんが作っていないようなデザインのものを作って、ビジネスにつなげたいと考えています」

スーダン難民の支援をしているC.Samson 氏からの現況報告です。

Invepi 難民キャンプ支援プロジェクト報告

難民確認作業が終了した６月末までに再度ｉｎｖｅｐｉ難民キャンプに行った。この時は Save the Children International の好意で移動手段を手に入れることができた。
サンダルやパジャマなどを運ぶことができた。そして、Save the Children International のオフィスで荷物を降ろし、数を数えた後、５つのグループに分けて配った。

まず学校に行っている子どもたちを確認して最初にサンダルを配った。というのは、５月に学校を訪れたとき子どもたちのなかには、はだしでトイレを使っていたからである。7月の後半では我々は、難民と近しい関係になっていると感じた。子どもと女性だけのグループが最も貧しいグループであるとわかったので彼らと話してグループを作り一緒に働けるようにした。この時点で我々が学んだことは、彼らには平和と愛でお互いが喜べるようにすることが必要だということであった。このことは、子どもたちにとって、一緒に遊べば少しは容易にわかることであった。
女性グループの人たちと話をしながら石鹸、ボディークリーム、寝間着を配った。女性たちは、自分たちでグループを組織して感謝の歌を歌い、喜

びを分かちあった。特に、年老いた女性たちに寝間着を配るととても幸せそうであった。しかし、支援物資を手にできなかった多くの子どもたちや女性をがっかりさせたまま我々の使命を終えた。難民たちに大いなる支援を与えてくださったアルディナウペポのみなさんに感謝します。それは、支援を受けられた難民たちにとって大いなる安堵感と喜びとなりました。
学んだこと
我々に必要なことはお互いを愛し平和な中で生きていくということ。戦争は、人を仲たがいさせ非人間的にする。若い世代は、彼らの人生を通じて次々と失うものがあるということ。
チャレンジすること言葉の障壁。文化と文化的価値の違い。
5月の半ばそして6月7月8月の半ばの現在にいたるまで、沈黙の天候が続いていて、ずっと雨が降らない乾燥状態にある。この気候はとてもめずらしい経験だといえる。
交通手段を雇う費用がとても高いことが悩みである。
以上、みなさまに感謝申し上げます。神様のご加護がありますように。

サムソンとそのチーム

教区婦人会からの声

沖縄教区婦人会　　マーガレット 知花 阿佐子

2017 年より聖ペテロ聖パウロ教会と聖アンデレ教会で沖縄教区婦人会本部担当となり、これまで婦人会研修会や教区の諸行事への協力とともに聖職候補生、日曜学校およびGFS活動等への支援、これに加えて、女性司祭への支援を打ち出し、活動してきました。今年の教区婦人会研修会は、東京教区聖アンデレ教会の笹森田鶴司祭を講師にお迎えし、「女性の司祭按手から20年 ～これまでの歩みとこれから～」という講演会を開催いたします。笹森司祭は、「女性の聖職に関わる諸問題についての調整の特別委員会」委員長を務めるなど、女性の司祭按手に関わる歴史と経緯をよくご存知の方で、大きな学びが得られるものと期待しています。

沖縄教区は12教会のうち、8つの教会の婦人会員84名と小さな群れですが、そんな私たちも全国10教区の婦人会員2562名の会員の中に加えて頂き、感謝箱献金を通して国内や世界の必要のある人々への一助となる機会が与えられています。こうした諸活動を思う時に、日本聖公会婦人会やコアスタッフの皆様の大きな働きに、感謝と重要性を実感いたします。全国の婦人会の皆さまとの共働を通して、主の御恵みの中で共に歩むことができること、さらに会員が増し加えられるよう、頑張りたいと思います。

婦人会活動に携わる中で実感することは、信徒の高齢化が顕著となっていることです。その際に思い出すのは、娘が高校生の時海外留学の際にオリエンテーションで受けた学びの話です。その時のキーワードは「TOPHATS」というもので、異文化体験を乗り越えるための手立てとして紹介されたものでした。T は"Talk" 話す、O は"Obey"従う、P は"Participate" 参加する、H は"Help" 手伝うまたは助ける、A は"Affection" 愛情、T は"Trust" 信頼、そして S は"Smile" 微笑みを指し、留学先でのホストファミリーや学校・地域の人々と溶け込むための行動指針を示しています。これらのキーワードを聞いた時、私たちにとっても日常生活における他人との関わりにおいて、この指針は応用できるのではないかと思った次第です。例えば、教会に新しい方がいらした場合に、まず「ようこそ！」と声をかけることが Talk に当たります。主の教えに従うことは Obey, 主のご用のため行動することは Participate, お互いに助け合うことは Help, 愛を抱くことの大切さは Affection, お互い信頼し合うことは Trust, 最後の Smile は、お互い微笑む中で送る日常生活は、なんと幸せであるかということを実感する瞬間です。

余談ですが、毎週日曜日に私が経験している Smile について書いてみようと思います。私が所属している教会でも、信徒の高齢化が進んでいます。新しい聖堂が建てられたことをきっかけに、若い世代の方々に教会に足を運んで欲しい願いつつ、第3日曜日の午後に「小中高生アワー」などを種々企画するものの、今の学生は忙しく、なかなか参加者が集まらないのが現状です。そこである信徒さんより「我々、祖父母世代が忙しい父親母親に代わって、教会に孫たちを連れてくるようにしてはどうか」という話があり、そこで登場した2歳～3歳から時には小学生のちびっこ達は、アッシャーの付き添いのもと、礼拝中に献金係としての出番を果たします。ぽちゃぽちゃした小さな手で献金袋を持って、礼拝堂の中を回る姿には思わず笑みがこぼれます。次世代にますます豊かな祝福が注がれることを祈り、「感謝と賛美は私たちの務めです」と声高らかに謳う大人たちがいます。多くのみ恵の中で生かされていることに新たに思いを馳せる瞬間です。これから折に触れて TOPHATS を思い出し、教会内の世代を超えた一致につながる輪を広げたいと思っています。

2018 年度 感謝箱献金 お献げ先・支援額

✧ 「聖地ろうあ子どもの里」（エルサレム教区）　35 万円
「聖地ろうあ子どもの里」の逼迫した財政，及び「シリア難民キャンプでの支援活動」の一部支援としてお献げした。

✧ リグリマ・ジャパン　25 万円
バングラデシュの少数民族ガロの女性たちの地位向上、経済的自立、差別の撤廃、尊厳の回復、安心して暮らせる社会を目指す活動のためにお献げした。

✧ サイディア・フラハ　25 万円
ケニアの養護施設へ、保護を必要とする児童受け入れのため、施設の維持・運営にかかる経費の一部補助としてお献げした。

✧ アルディ ナ ウペポ　20 万円
ウガンダのグルにある職業訓練センター、及び南スーダン難民支援プロジェクト活動の一部支援としてお献げした。

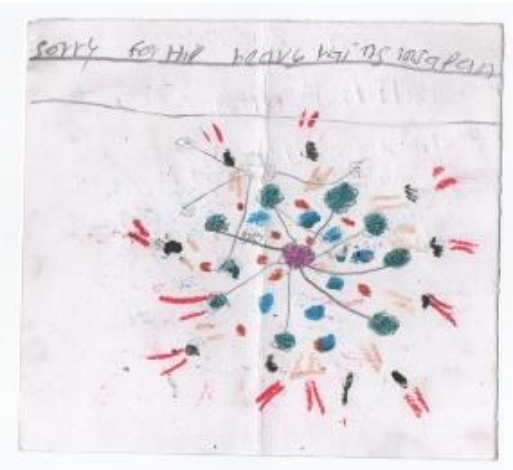
✧ 国際子ども学校（中部教区名古屋学生青年センター）　20 万円
日本で暮らすフィリピン人の子ども達の学校。教科書や教材費、学びに必要な経費の一部支援としてお献げした。

✧ 難キ連 (難民・移住労働者問題キリスト教連絡会)　15 万円
入管被収容者への面会支援に伴う働き、仮放免者の医療費、教育費支援としてお献げした。

✧ 東日本大震災支援(積立)　今年度積立金額 20 万円
被災された多くの方々が今もなお、帰宅かなわず放射能被害のもとで暮らさざるを得ない状況にある。2018 年度まで毎年 20 万円を積み立てる。

✧ 災害被災者支援(積立)　今年度積立金額 30 万円
国内外を問わず、災害時に即対応するための備えとして、前年度に集まった感謝箱献金総額から 2018 年度まで毎年 30 万円を積み立てる。

神戸教区婦人会　支援額　3 万円
神戸教区・西日本豪雨被災者支援室の働きのため一部支援としてお献げした。



サイディア・フラハより

ケニアの子どもが、今夏の日本の豪雨被害を心配してお見舞いの手描きのカードを届けて下さいました。

行ってきました

ブラザー・アンドリューの来日　懇談会

9月13日　東京教区会館

「聖地ろうあ子どもの里」の前施設長ブラザー・アンドリューが、韓国からアメリカへゆく 途中、日本に立ち寄られ懇談の場を持ちました。
見えない、聞こえない… そんな子どもをどう育むのか？
それはヘレンケラーのサリヴァン先生がしたように触れ合うことでしかできません。その子、一人にしか伝えられない。それを今の時代、野村萬斎さんの動きをゴジラにさせたように、手の動きをコンピュータで配信することは可能です。しかしそれに触れて動きを知ることはまだできません。その研究を求めて、韓国へ行かれたそうです。その技術が可能になれば、世界中の重複障害を持つ人に言葉を伝えることができます。研究者さんたち がんばって！！　（事務局 日暮）

通訳サイモン・クレイさん・ Br アンドリュー
神崎雄二司祭夫妻

WOLD 代表来日講演会

10月6日京都教区センター

京都教区婦人会主催による WOLD(女性の解放と発展のための組織)代表のプレマ・シャンタ・クマリさんと娘のセリーン・ヘマ・マリーニさんによる～ダリットの女性たちの自立をめざして～WOLD の活動の歩みと現在と題する講演会が開催されました。当日は長年、WOLD の活動を支援し続けている「ニームの会」(2017 年度感謝箱献金お献げ先)代表の山下明子さんが講演の背景説明と通訳をして下さいました。
クマリさんは南インドのタミル・ナードゥ州出身のダリット(元「不可触民」)女性で 68 歳です。当時のインドで、ダリット女性としては大変稀なことに大学で社会学、教育学の二つの学位を得ています。
インドの女性はカースト制で強い束縛を受けており、その中でもダリットの女性は過酷な状況にあります。差別は酷く教育を受ける事が出来ないため識字率が低く、必要な知識を得る事が出来ず、古い因習のため命の危険も多くあります。1985 年にそのようなダリット女性たちの為に WOLD を創設。意識啓発を行い、平等を求め、男性支配(暴力)に対抗、自立をめざす意識改革を行い、農村女性のトレーニングセンターを作りました。2000 年からは中央政府の貧困女性対象の少額融資プロジェクトに加わり、中央政府の政策が変更になる迄の 8 年間にダリット及び貧困女性の中に 1500 のグループを作り、彼女たちの為のエンパワーのためにトレーニングをし、地域レベルでのグループの組織化をしました。
娘のマリーニさんは 47 歳、医師で精神療法士の資格を持っています。母親の農村センターを手伝い、特に「ダリットの子どもと女性」の健康について啓発活動をしています。貧血の予防と治療、妊娠中のケア、牛乳を飲むことで栄養失調の改善などで安全に出産することができ新生児の死亡を防げること、衛生的に生活することにより感染症の防止になる事を教えています。また、薬草の重要性を説き、有機栽培、自然食の普及に力を入れています。しかし、現在インドではヒンドゥー至上主義が強くなり、WOLD の活動も難しくなっています。また外部からの援助が届きにくくなり WOLD には厳しい現状です。

ダリットの人々はインドのカースト社会の最下層で「アンタッチャブル」として人間扱いされず、また女性はダリットの男性からも暴力を受けている事など具体的なお話を伺い、その女性たちの自立を支援してきた WOLD の働きが今後も維持継続され、多くの女性たちが安心して自分たちのための生活を手に入れることが出来るように祈るばかりです。　（事務局 永井）

(写真　京都教区婦人会提供)

その他

4/7　アルディ ナ ウペポ報告会(東京教区聖三一教会)
5/3　横浜教区東神地区東神バザー
6/28　横浜教区社会委員会主催難キ連面会支援
　　(東京入国管理局)
7/21　東京教区正義と平和委員会主催講演会
「あなたたちも寄留者であった－在日コリアンとバングラデシュ少数民族 ガロとの結びつきから」

7/24　聖公会神学院訪問
10/10　横浜教区社会委員会主催難キ連面会支援
　　(東日本入国管理センター)

感謝箱献金事務局　チャプレンから

司祭　エレミヤ・パウロ木村直樹（大宮聖愛教会）

「ガリラヤのほとり」をとおして、わたしたちの感謝箱献金がどのように用いられるかを知ることができます。わたしたちの日々の生活からは遠い世界の話です。しかしわたしたちは感謝箱をとおして、そして本誌をとおして、その世界に近づくことができます。一日一日の神さまへの感謝の思いが、遠い世界とわたしたちを繋げるものとなるのが感謝箱です。

感謝箱は、日聖婦の活動の要です。日聖婦は、各教区婦人会の連合･連絡組織というだけではなく、感謝箱献金をとおして、共に他者のために祈り、献げる組織です。

この度、九州教区女性の会から、役員選出ができないため日聖婦を離脱せざるを得ないとの連絡を受けました。ただこのことによって、九州教区での感謝箱献金の活動がなくなることにならないよう祈るばかりです。組織維持は困難でも、一人でも教会単位でも、感謝箱献金をすることはできるのですから。

感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。

私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。

私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられますように。

また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

主イエス・キリストのみ名によって　　アーメン

感謝箱とわたし

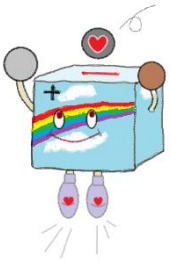
聖職候補生　マグダラのマリア 島 優子
聖公会神学院 2 年

聖公会神学院での授業の一つである「聖公会論」において、今年度は日本聖公会の形成について学んでいます。そこにはウイリアムズ主教、ビカステス主教、また英米からの宣教師たちの偉大な名前が当然登場します。しかし明治時代にこの感謝箱献金運動を伝えたのは米国聖公会の婦人たちであったことを事務局コアの皆様からお聞きし、名前こそ隠れていても貴重な働きをした方々の存在を忘れてはならないと思いました。以来、戦時中の混乱期があったにもかかわらず、感謝箱献金が現在に至るまで日本国内のみならずバングラデシュ、ヨルダン、ウガンダ、ケニアと言った海外へ向けても尊い宣教の働きとして受け継がれているのは、関係方々の隣人への温かい愛と、ご苦労をいとわない姿勢があってのことでしょう。ただ支援金を送金するのではなく、現地を訪問し顔と顔が繋がることは、人間関係を作る上で欠かせないことだと思います。

現在私は日本聖公会婦人会から、神学生として被献日献金より書籍代補助をいただいています。また 2016 年九州地震の際にはこの感謝箱献金より支援活動への緊急援助をいただき、大変感謝しております。国内では今年の夏も大規模災害が立て続けに起こりました。私たちが主への日々の感謝をこの献金箱への小さな捧げものとすることで、経済的、人権的に抑圧された過酷な状況で暮らす世界中の人々、そして災害などで突如として苦難に見舞われた人々に援助と励ましを与えられる大切な運動だと知りました。私自身が助けられたように、今後自分もこの活動に参与して、小さく弱くされた人々と関わっていくこと。そして将来、周囲にこの感謝箱献金の存在意義をお知らせしていくのも課された役割の一つと考えています。

プロフィール
出身：福岡県生まれ
　　九州各県育ち。
出身教会：熊本聖三一教会
経歴：ピアニストおよび指導者としての人生であったが、転身し、2017 年 4 月より聖公会神学院にて学んでいる。
趣味：国内・海外旅行。
　　ウォーキング。

【訂正とお詫び】
「ガリラヤのほとり」29 号 3 頁の記事「リグリマ・ジャパン報告」において誤りがございました。（誤）上澤信子様→（正）上澤伸子様
訂正致します。上澤伸子様には深くお詫び申し上げます。



編集後記

「ガリラヤのほとり」30 号をお届けいたします。
原稿を執筆頂きました皆さまには感謝申し上げます。
今号の「ガリラヤのほとり」をお手に取り、多くの方が紙質、印刷の良さに驚かれたことと思います。財政の厳しいおりに、このようなものを・・・とご心配なさった事でしょう。今回はより良質で、より安価な「ネット印刷」を利用いたしました。前回 2 回は管区事務所に多大なご協力を頂きました。これからは、お忙しい管区事務所のお手を煩わせることなく、また感謝箱献金事務局がどこの教区に移っても同質の「ガリラヤのほとり」をお届けできるのではないかと思い「ネット印刷」に致しました。　　永井眞由美

発行　感謝箱献金事務局
〒297－0032
千葉県茂原市東茂原 10－192
永井方
電話／FAX　0475－24－6915
E-mail kansyabako@gmail.com